

出生年月日	昭和十九年十月三日
性別	男
出生地	日本福島縣郡山市
父兄名	父: 岩田義一 兄: 岩田義二

生年月日

姓

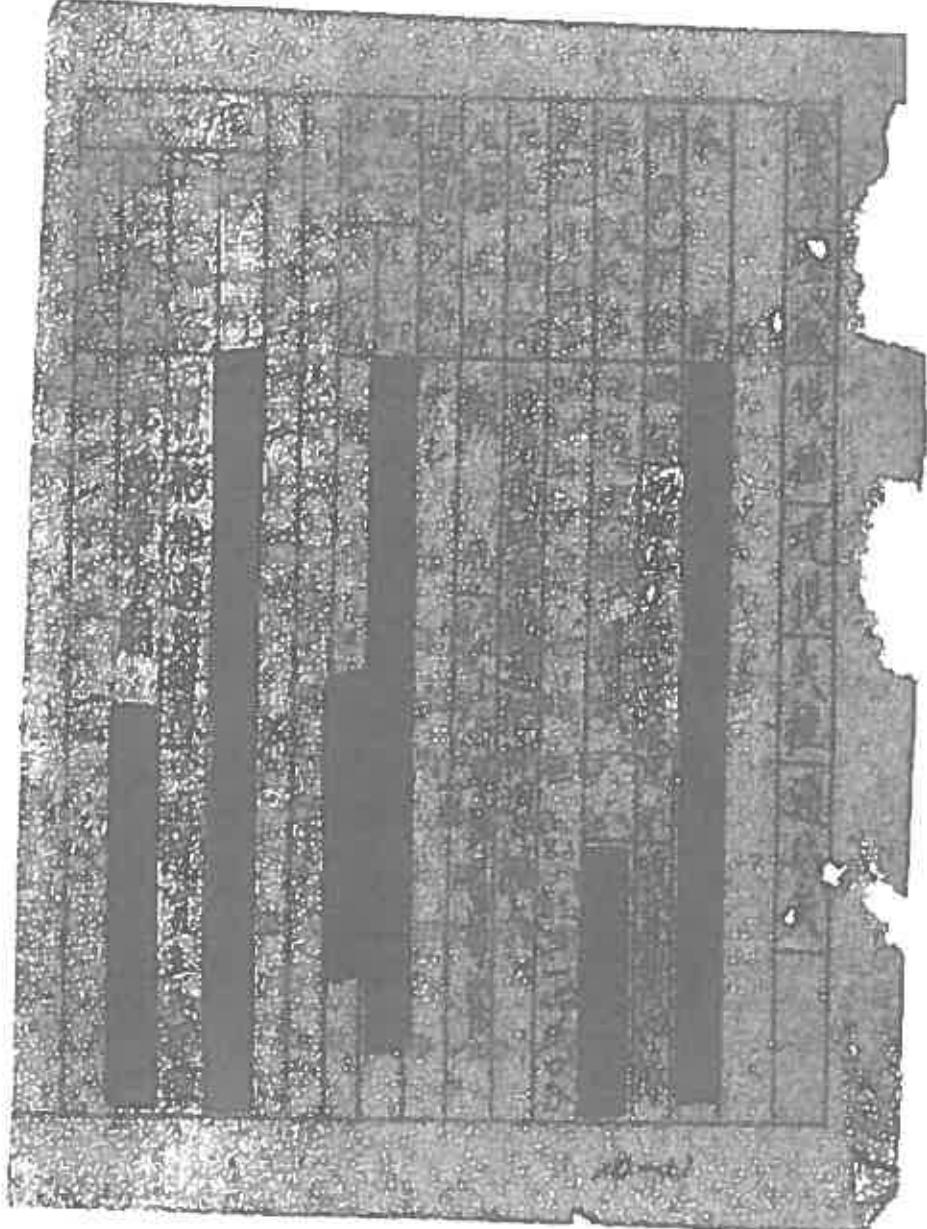
名

姓 梶原

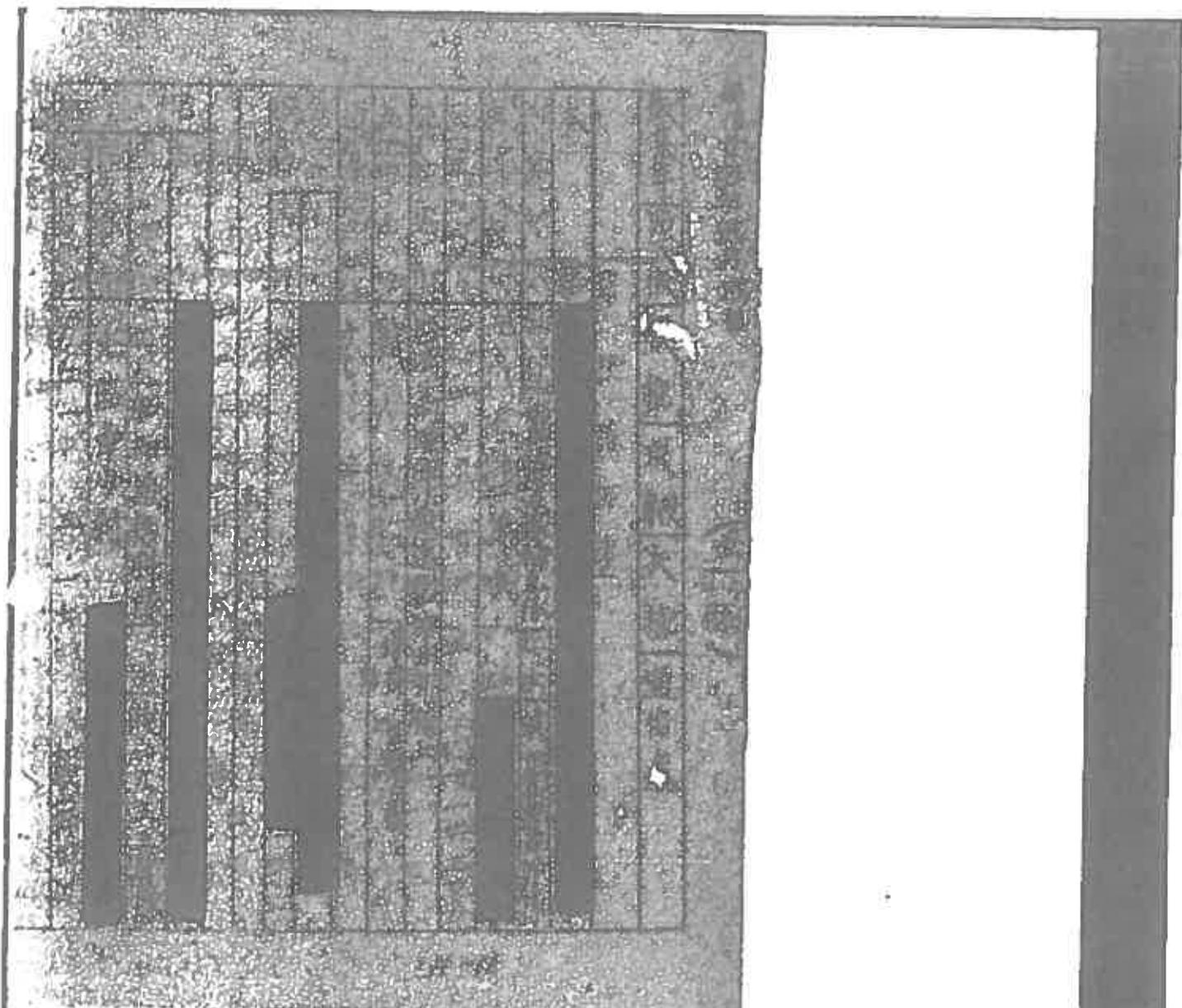
名 道雄

出生地: 日本福島縣郡山市  
出生年月日: 昭和十九年十月三日  
父兄名: 父: 岩田義一  
兄: 岩田義二

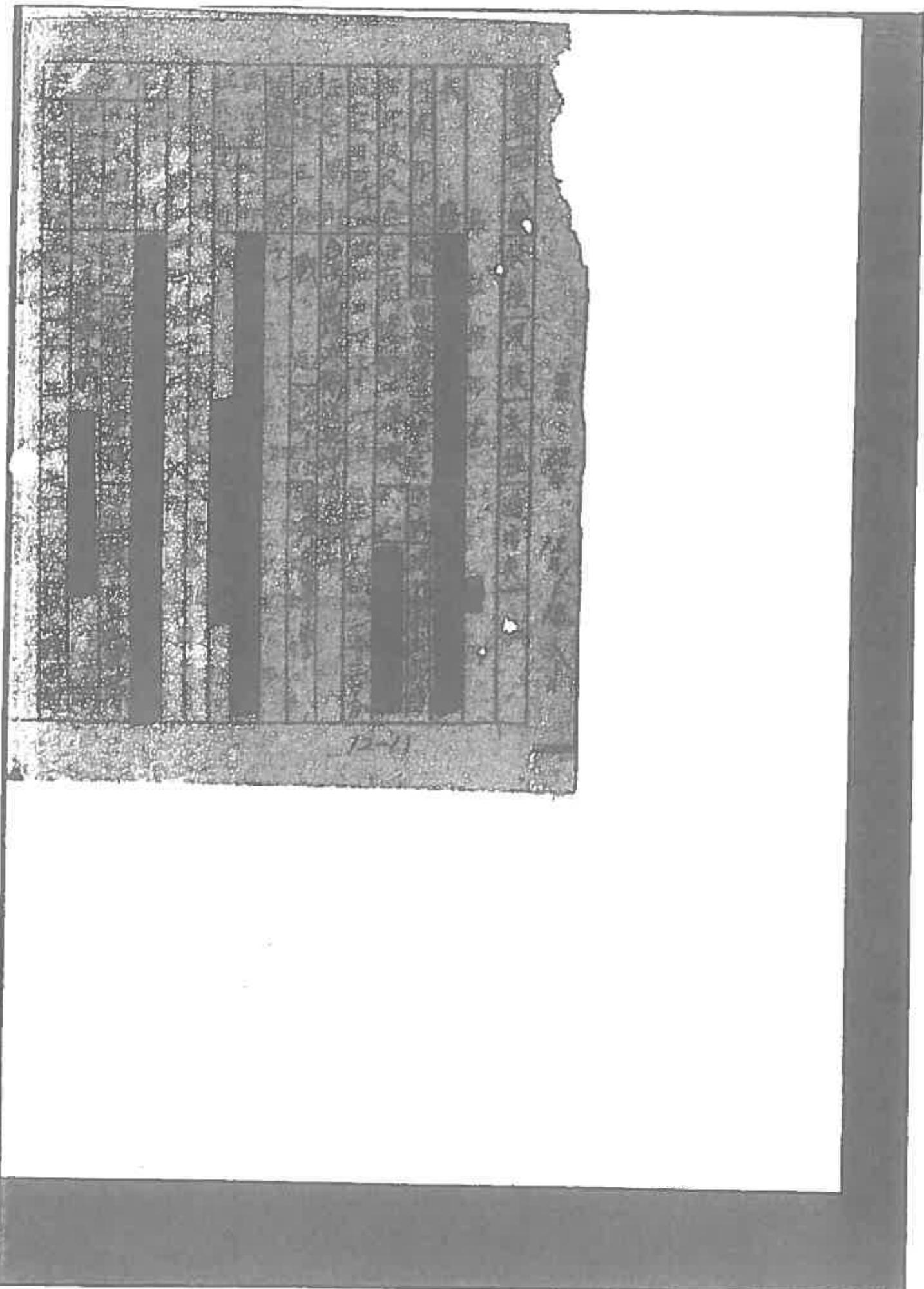




2333



2334

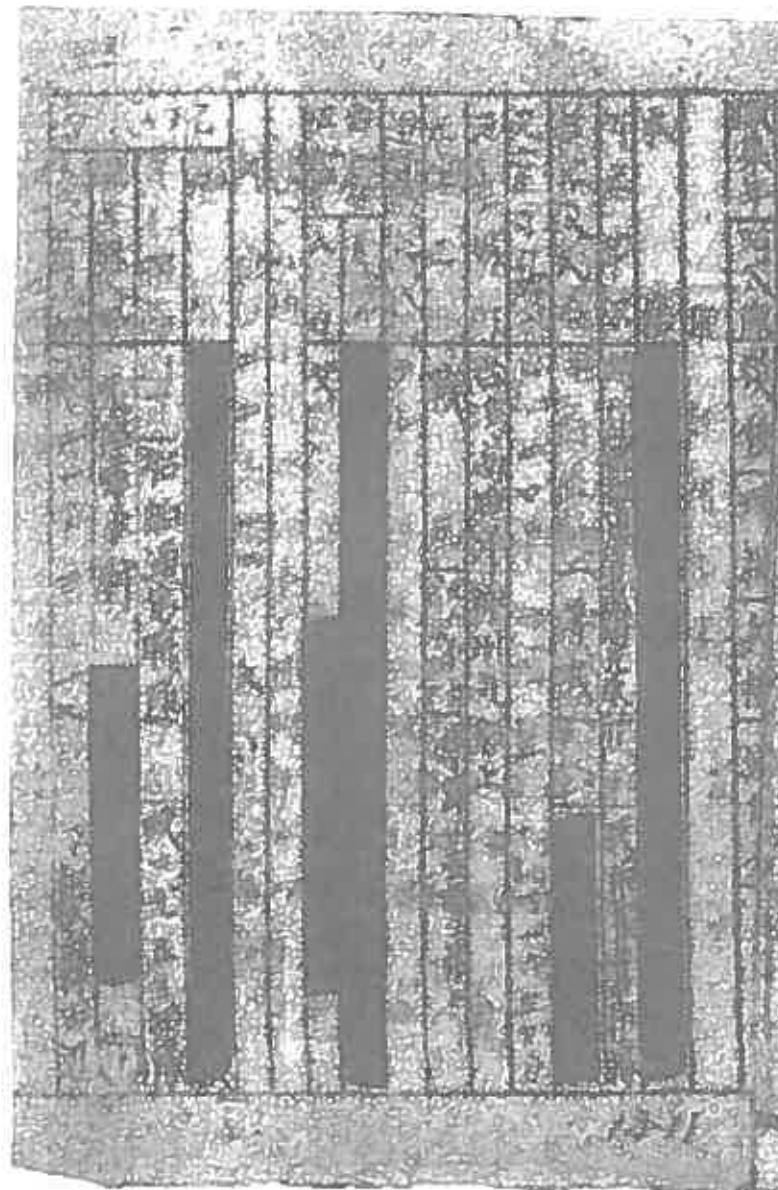


2335

卷之三

卷之三

卷之三



確認書

本籍地

陸上自衛隊

右之者昭和十九年九月二日現役兵トシニテ號第一六七〇部隊三番九月  
三十日晚三九四四部隊三轉屬ア今セレ十月三日廣島出發十一月三十八日第三  
船團輸送司令部轉屬同日上陸于南洋北サミルナリテ登陸同日夜九時  
着同日未日南サミルナリテ整齊同日未時相葉島上陸同日未時精丸  
号之艦に向洋航昭和二十一年一月三日朝高雄撃子目前東ナマニシ  
空襲ラ多々直撃手續彈ヨ被下セルヤ ■ 石ノ海中ニ被レ一船萬丈が満瓦  
ト同時二船内ニル戰列艦レアリ本船並御三分後總會之昭和二十一年五月  
未時半分高雄撃沈

本籍地

元陸軍大佐

新潟県

陸上自衛隊

印

3-12

本籍地

現住所

右空

仙台陸軍飛行學校

昭和七年徵集

陸軍歩兵團

一戰死年月日 昭和二年十月一日

一戰死明証 合戰勝利

一戰死狀況

多處受傷

右記載

右記載

不敵多機突襲多處受傷未明火頭被燒死

不敵多機突襲多處受傷未明火頭被燒死

及軍援助而

出勤

三四月之季

敵

海上退避率

之軍

海上退避率

將兵

相合水溫八益

低下

一方等

等

解之以救助

則

滿方艦器

之

援助率

率

助之以退避

之

艦器

之

退避率

率

戰死率

率

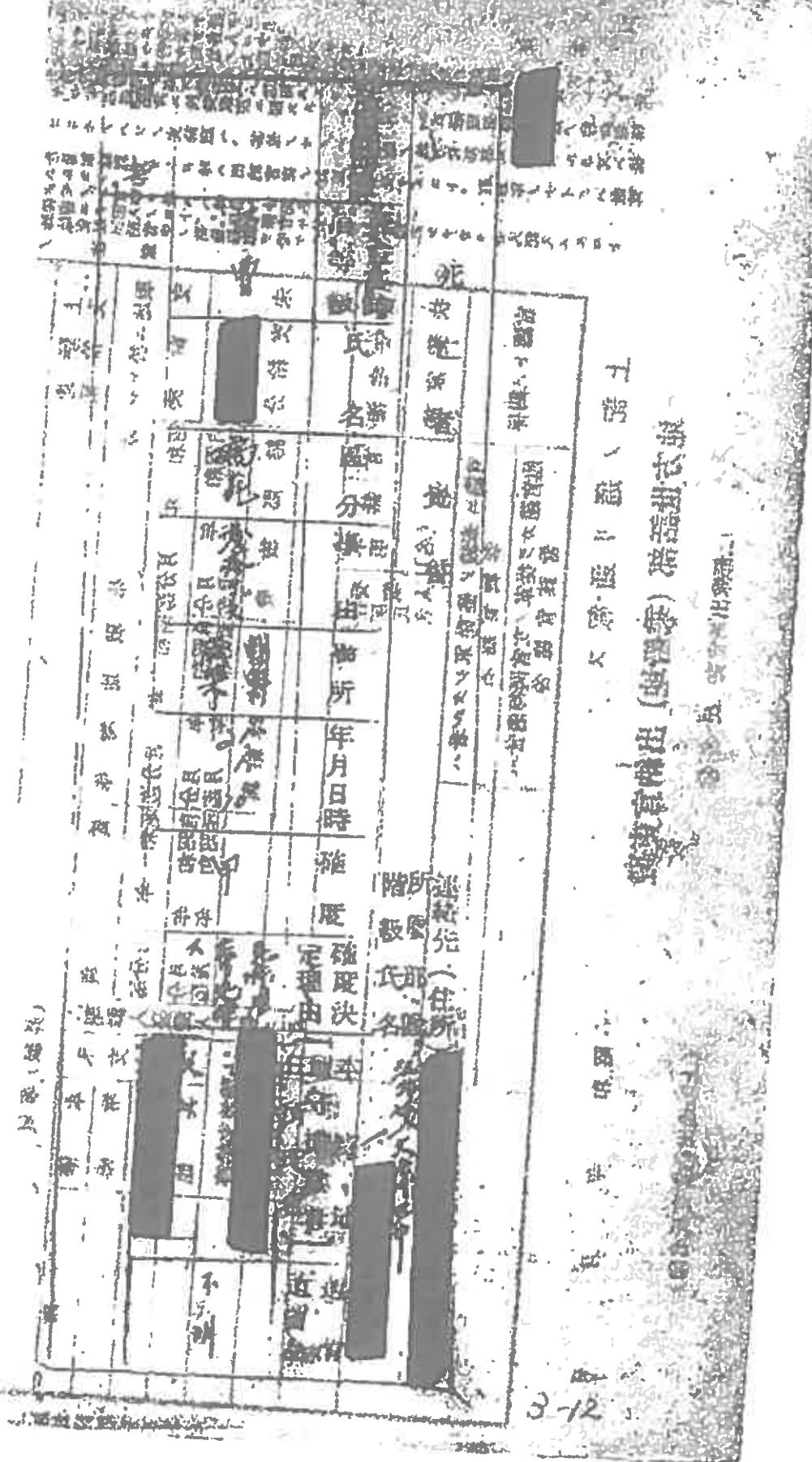
和之率

率

合軍備第軍備國英全對空無彈

陸軍少尉

脚本：鶴丸



3-12

2340

死・亡・環・認・證・明・書

昭和二十二年八月二十五日

死 者	死 本 藉 地	死 前 の 隊 别	死 亡 年 月 日	死 亡 場 所
現 記 者	本 藉 地	死 前 の 隊 别	死 亡 年 月 日	死 亡 場 所
現 記 者	本 藉 地	死 前 の 隊 别	死 亡 年 月 日	死 亡 場 所
現 記 者	本 藉 地	死 前 の 隊 别	死 亡 年 月 日	死 亡 場 所
現 記 者	本 藉 地	死 前 の 隊 别	死 亡 年 月 日	死 亡 場 所

注記上載記  
一現記者は死亡当時の情況を詳細に  
記入す。  
一階級は必ず死亡前のこと  
一確度(甲は正確乙は概ね正確丙は  
疑はしまの)は必ず記入す。  
一氏名の下に捺印五又す志れ内三上  
人との末は上  
長 分隊長 戦友

現 記 者 由  
一現記者は死亡当時の情況を詳細に  
記入す。  
一階級は必ず死亡前のこと  
一確度(甲は正確乙は概ね正確丙は  
疑はしまの)は必ず記入す。  
一氏名の下に捺印五又す志れ内三上  
人との末は上  
長 分隊長 戰友

死 者

死 者

一七、現設證明書

昭和二年一月二日

死亡場所 優等セジヤク南方マニビ上  
死後年月日 昭和三十年一月十二早一時

死亡場所 優等セジヤク南方マニビ上  
死後年月日 昭和三十年一月十二早一時

死亡場所 優等セジヤク南方マニビ上  
死後年月日 昭和三十年一月十二早一時

現體戴持三機仰頭上坐。現れ右腕銃操射。左腕斜す。積載せるカーバイド。蓋上泡と出しき。左腕全員退船する。左腕を止め。左腕四散す。又敵弾入行。

死前之記入は死亡當時の情況を詳細に記入。

一階紹介父す死亡前のこと  
一確度(甲)は正確乙は概ね正確丙は一  
般の記入す記入す。

一氏名、下に捺印。左文書二枚のうち  
この方の捺印は、隊長分隊長の二  
人との捺印は、戰友

死者	本籍地	現住所	履歴	年月日	年月日	年月日
氏名	五島	右合	詳	明	明	明

上のみ記載

注

卷六

四

二二二萬種易大隊  
一八九三七部隊

唐寧少尉

七  
七

軍械  
西隊

軍械  
軍械

一便日も耶裏ヤ別木从葉音落モ斯ニタ  
二二モ北ヨ前後二ケ所ノ御深ノ事  
二人だけに会つた  
と心掛サカル事は御遺族の音頭を手取る事  
人しむから仕事の事近にてて見事アキナシが御遺族の者に抱れて麻しく歌つて  
日本ノ御遺族の方が居て歌死を知りまつてゐたばかり  
なに口音付けてあるだらうとがり涙のな、不思議な毎日を過ぐねありんであり  
やろ事たりう早く運転を取りなくてはと車を借りて  
じまよの、したよくともひのひ分つて元氣が退散かりて教かるがんただにしても車  
の燃費が最も高を過ぎたる旗旗を残さるゝは吾々を折してはとやり行ひ度  
方は海事水泳に知らせるよりも東があつた。すれども彼もシルク  
はおはとく所で船を失くす事なく車で北千葉御幸不器用に色々の企くものから  
人でとた入室火解の事多き事とてその火解を既に早く御知り事に親は  
沙す布を着て往くかの事とて自らの意を傳へてゐた。故に親は  
にひがめし者未だ人算を取つてみた。御前御の言葉は一つつかりと  
親は子を捨て子は全てを捨てフライ戦ひて之戦が勝敗ビズリテウチを茶や饅  
うれ今になつてはが肉親をも奪つてはゆる。今日は君の娘を訪れるが御前御の親  
見事御の御親を萬代ノイエホを繕ふよひうからめん御前御の御親  
ソレに御親に人方だらうか二人を連れて壁は此日のながれて一通深く下りしは  
いた今秋は正直を拂らなケルはアトリキ人和夫が知りてゐたのではあるが御親は御  
めうれな、いせ、かの御親が御親に御親に御親に御親に御親に御親に御親に御親  
御親を重ねて、御親へ方ことをかがり在たる御親を御親に御親の心を復つて御親



二二〇三へまつりるりい先金のよいた可空(龍谷大一)と譯せ兼て其ル附近に墜つて  
 どうにせに二けんでゐるのが解りました。飛行場襲撃がどんなに燃然なものかを知らなかつて私達  
 はそれでは引えかへまうと云つた安易な者へて今不道を走り出しました。其の時は私は一番後から  
 つづつたのです。始めて来た飛行場です何處が安全な場所でどこが危険なのか知らず只人う走る方  
 向へ自分達も追つてゐたりです。麻原生治が永からぬで体力もすくは回復するなかつたくをすれば  
 あはれくうちに他の者に追いつきました。私は後で、まことに走り起鳴りました。  
 すがり追つて笑ひながら走りましたが何でもさう云ふ急降下車と云ふに様がす。防空壕の附近まで来て時をすばや  
 く車に入ろうと云つても船込んでゐます。續いて入ら私は場所に出なくして危機と予感しました。被弾爆  
 弾から投擲下場外の建物に集中されちらう少し走らなければ車はだしう出で私は三う呻んで皆  
 を車にした。編隊の爆音は愈々背後に迫つてゐます。走りました。今度は私が真先を走つてゐました。  
 らんと圍つてきました。■にけが横札の橋です衛兵所の門をやつと通り過ぎ廣い道路に出で  
 した。アリ/  
 聚団の様な落丁音頭上に爆弾はバテ撒きました。其の音が轟轟激しく迫つて來ます。  
 もう危険間私は始んど同時にアスフルよりの上に伏せました。身をかくすと云つては小石一つありません  
 其れから光は熱我夢中でした。耳を離する跡前後左右に私は取られんで力を失ひ一矢縣命へばり  
 付さざる体が其程度に空中にちら上げて大矢は左腰が頭と云はず背と云はずビヨンと突き落つてしま  
 す。彼尾がヒヤツと死の音と共に靴の踵を全部ちつてゆきます。生きた心地がない炸裂が一々繰り續  
 繰に顔を上げてみるとすぐ前に■がねました。上半身を起して見てゐます。どうして逆事が  
 あります。■は胸小腺に一瞬三聲二三脚をして私は■君のそばに送りました。どうして一聲不  
 哭しません。■は胸小腺に一瞬動かしてました。はどうにか自分で動く事が出来そうですが、  
 しきりしろ一瞬三聲二三脚をして私は■君のそばに送りました。どうして一聲不  
 哭め出でるが爲め前額を頭裏り生え際に三種程り破尾傷と受けたまま頭部を左側  
 の傷なんだ。と悲鳴の間に云々でも何の並事も有りません。餘り行すかり失はれ見開いた眼は  
 何となく筋氣がありませんぐくくおれは、田元氣を出で度幾度も撕ました。剥ぎたが右腕と左腕を上部  
 まくと赤き出した十赤も踏み出した頃をセラハヌリヤ頭上にさすと云ふ落丁音がまた次の編隊

が混亂の地たゞ今度は致目だ。掩りでゐる君の足下から少し目を上へた時有難い。左足に大スガヘタ目付ました。したつた今爆弾でアケラレたばかりです。君と協力しておつと  
 其の中に飛込みました。同時に前並でひくす。この地図で立て爆発しました。遺物を吹き飛ばし大砲  
 をひくす返して人は壊れた方中に埋められた力士、泥だらけになつて倒れました。君を引出しあら  
 ました。直經十米以上もある此の火は熱々も私の数倍もあつた。破裂された大きな水道管は  
 崩れ、天井の方は水が窓つてきます。此處も未だ爆撃の中でからくらも崩れてあります。火をすぐ  
 灰も煙も発したが匍匐出せなかつた。では深さに管から噴き出した水がまわります。火  
 燐を登る手様に火を燃えさせたが、腰とくるまで。あせつて二三度試みましたが駄目です。断念をして  
 頭を下します。大声で「少しづつ」と云ふました。が近事がありません。血の氣の引きました。  
 頭が空氣の方に開いた力士が目覺めたりから日本式が見えた。取て四角に折つて額に上に乗せ  
 左手を取つて其の上にあつてがつてやりながら穴の上を見上げました。外に山川は何があるかわからず。外に  
 山川は何か利用するものがあるがれ知れない。手の少しつづり伸びてみると、山川は刃うな。手の  
 指先が目に付いたが逃げてそれを足に踏むました。然しそれから露頭が体は完全にかぶつてます  
 ござん。そこで爆発が起つた瞬間右足一筋を痺だ、か打たれた様な気がしまして右足の脛骨筋が  
 利少なくなつてます。左足首は骨折して力士の力士がです。伏勢が立つておれたがどうにか赤く事が出来  
 ました。が右足の骨をやられてどうする事も出来ません。溝の中に滑り込んだ。まごうとくろをす  
 しに爆破者は次から次と襲いかかり頭上に一と糸雨の様な音をはら撒いて過ぎます。至近弾が  
 炸裂する度に皆は半分方に潜もろと。静ち合ひます。一人残されましたが、君の事が危機  
 になりなさ来ました。もう少しうれ張つてゐて北爆弾は少し離れた間に落ちてゐる。高射砲  
 の砲塔がえり立つて、落ちて来て才程までせきの平に窓ひ込み時を機会に身をひそめ  
 回避を願ひ、漸く落付きて取戻すと短い時間の出来事が夢の様に浮んで来ます。  
 もともと無事ではある。すると助ったのは餘一人が色々な事を考へあぐんで淋しく  
 なる一方で又自分でかけが此處にあらざる所の小事が妙に不快な気持に落し入ったほらなんなります。

時間にすれ合一時間も経つたでせうか高射砲が其の鳴りと止りたりで終つたかなと思ふ不要な  
まゝ繁々から出て来ました天を覆う方に大きな雲は高く登り空はすく晴れてこれもえうん  
と高く高度を取つたBの編隊約十機があり向になつてゐる私の顔の上を太陽の光を力く  
反射させながら過ぎ去つて行く所が私。私はここで始めて敵機を見たりです今まで飛行場へ飛行して  
盡りぬるが、嘘く様に懶らと便人を行くつてオ飛行場から何箇所も煙が上つて乃是  
私の居るところの君と命れた測候所の附近から可成り離れてしてます。29日編隊  
完全に姿を消し頃未だ零戦マーケと附した護衛班の自動車が何台もたく現場を行く乗  
始めました私は目に付く處になつて機銃班の收容された五時頃にして陸軍病院の  
玄関に下ろみて子守と廊下には血玷ち着けに軍服が山の如く積み重ねられてゐるのをす。飛行場司令部  
で敵機未襲に因する何か情報も入れなかつて爲め警備や補給の兵隊や整備員空中勤務  
者等全部が飛行場に残り航空介護の少年達は何と知らずに平常通り勤務をひきこむ  
がす後半で着いた遭難者は此處で收容され不再公使館の病院に送られます。病院内は  
人手が足らず混雑至極なりましたが全国の陸軍病院からは應急の衛生兵や看護婦が  
毎日で呼び寄せられました悲惨な光影は見てから少しずつ次から次へと運ばれる重傷者は午  
前中のベッドに入り半ばす軍医の手當も待たず事切れで行きます。どうも小人達と一緒に  
廊下に寝させられた私はかうと自分の番を待つてゐました。どうしただろ。君は運転手さんた  
かしらん。自はうまく逃げたつてくれた。どうか自分でだけが居ると云ふ事が私を假はれなひ気持ちに包り  
ます。遭難者の多くは今まで此の病院に来た患者は其の日のうちに治人とが他所へ送られる事に  
なりました私は今から台北に送られるところ不患者をつかまへノートを手切る。君達の知  
入に遭難の状況を知らせました。其の夜は子んじりトモセ下明しました。苦痛を訴へる患  
者を呻き声は足の小み場もなくギリギリと詰めて廊下にされた此の病室の方々から聞え  
来ます。水を呑む頬から水を呑むと叫ぶ者其と並び十数衛生兵等私の頭の所に腰  
を下し兵隊は先程から水を飲んでおましたが其の声を最初に抱つて行きました。飲ませようぢやな  
いが少しあつてみよが可樂想をひらくと誰も合つてゐた衛生兵がガーベに水を浸して持つて来た時  
には其の兵隊はもう口も開けさせんでした翌日カリ空襲が頻繁になさ未ました其の度毎に人  
におぶく水を防空壕に逃げるのでした飛行場除の機体が大隊に足つたと云ふことを聞ソラ軍隊

に来て貢ひ三人の官等級、氏名や遭難地炎を詳しく述べ依頼しました。次日其の報告  
 場に連れていてくれと頼みましたが許されませんでした。登録簿が出来を始めたからもう一度連れて方下  
 るので聞きました。其がやかで隣り病室で尋ね當てたうと高い調子の語声です。私は突然  
 音が大きくなる様大音量を出します。私は突然  
 室の前に駆けた顔の■が現れました。私は思つておこしたと云ふ事が聞え病  
 小さな達を察して小泣いたんだ■がすぐ隣にゐるんだからびっくり■はどうして上院に立  
 てしもメメにちよだ次山後容これでゐる今に解ると云ふ■は早速現場に駆け付けて  
 大部遙かでから隣り顔をよそ見つしてどうとも解らないと其から急進入の苦い声が  
 事のみ、口が開いたりです■だけが走りながら毎日發かれるには解らんとしてよげて飯つきる事  
 です。■は臺灣軍転属と云ふ台南よりの電報で今月に乍ら■は小  
 險と云ふので患者達を安全な場所に分散する事にならずした。私は阿里山の近くの奥平嶺と  
 云ふ所に行かなければなりません。■は台湾軍転属と云ふ台南よりの電報で今月に乍ら■は小  
 のです。終連車ぐ退院をあがめ所へ行かなければ連絡はつけて来ると約束。或る朝早く三隻  
 の車、車に用意された車で■と分れました。山の病院では同じ部屋に■と暮す事が出来ます  
 しな。■はすぐ回復しましたが私は足と右脇が大々く腫れました。部屋に■と暮す事で■は小  
 合せて来下さい。其頃私はもう■君の事は言はずなりました。其の處置を  
 どうすればよいかと云ふ事に手考へました。嘉義の病院長が時々山に来ては■を候補  
 生の件を調べて行きました。今日當時日が経過した以上私が戰死の現認證明があつたので  
 あるからと尋ねると院長は軍医の立場から最後に別れた時意識があつたと云ふ一時の為だ  
 せつてあげなくてはと云ふました。候補生の病床日が院長が午前六時半に此の實際情況から  
 ■を准許したと云ふ事です。意外に誰も知つてゐる所がありません。

算上に因ります関係書類の全部比島に移されてたうです。台南から[ ] は台湾新報  
でしてしまいました。其がり移すにあわたる事も大いに不便りを最後にアレツリと音信を断  
離疎聞えました。打機傷もどうやう治りますアリ元氣になるとこんな山奥に病  
院までお届たくなく早々に随い小こを男らしく働き入しました。と牌因カ歎にれろりました。  
此の病院も他の部隊と連絡が半々とれず元気になつた患者を看護もてあつてか延々とま  
でした。 [ ] は戦争がら航空隊だと云つて一人で色々と八方へ連絡をして力不足が遅に機  
会りを損失と台北に行つてしまひます。心水連絡するから後を追つて二つと約そく令水ました。  
が私は既に重いキブスをほり、いかんと落付のびり病院へ生活を長く間隔けられ  
ばなうませんでした。四月頃漸くギズ人はほゞ並五日やつとり思ひで航空部隊に転属す  
る事が出来ました。

と再公會員事が出来たのは終戦後でした。其以来二種で内地道飯つて来ました。  
私達の疑問は [ ] 考め南支那海軍艦方が公報を取に受けたかと云ふ小莫でした。其が若し  
知つて居らざるとしたら凡申込連絡事務所に手を盡すと調べてみらざる筈にから  
察本連く知る事が出来ました。と考へ地方世話部、留守業務部に問合せました。が  
どう云ふ件で今、所未て云ひと云ふ事であります。其れではお家族の方はもう知つて  
あらざるのからしれど、と思ひ落してどう云ふ事か、うの向ひ念せがちたらすぐ知り合てくれる  
ませんが突然どう云ふ事を知らざれて自らの志願などと云ふ事かしと注繫し致しました。机の記述で  
機に接觸し制御装置を操作する事に一々力をしました。 [ ] ほどんな頃が馬鹿だか知り  
ませんが突然どう云ふ事を知らざれて自らの志願などと云ふ事かしと注繫し致しました。机の記述で  
讀みづらかつてせうがどうぞ君のほかないが最後も腹ばれをよと脅君の靈吉尉も？  
上半て下さる事を私共から御頼み致しました。と連絡の事がりがあり了すから  
事の連絡を述べる事で御外様に御報告致しました。零きじき折柄皆様の御自愛を  
祈ります。

昭和二十一年十二月十六日

様

草々

